－所蔵作品紹介－

遠藤　享　ENDŌ Susumu
SPACE＆SPACE〈BOTTLE〉

作品データはこちら

例えば美術作品の写真をカラー印刷した図版は、一見いかに精巧であっても、基本的には赤・青・黄の印刷用３原色と黒の微少な点の集積からできあがっている。一定面積あたりにそれぞれの色の点が占める位置と割合によって、微妙な色調の変化まで再現されるわけである。

印刷の事情を少し知っていれば点の集積など種明かしにもならない常識にすぎない。しかしそこに表現の鍵を発見したことが、遠藤享の版画を決したのである。

遠藤は甲府市に生まれ、終戦の年旭川市に移った。1954年、旭川の前衛志向の画家たちが集まったグループ「黄土」結成に参加。その後上京して武蔵野美術学校デザイン科、桑沢デザイン研究所に学び、1967年からはフリーのグラフィック・デザイナーとして活動している。版画の方は1970年代後半より発表、〈SPACE&SPACE〉と題する仕事を長く続けている。

この「空間」「と」「空間」というタイトルは、世界の構造についての遠藤の理解から出発している。彼は空間も物もある種の「点」によって構成されていることに変わりはなく、両者の違いは集積の粗密の差に過ぎない、と認識する。その差も実は絶対的でも必然的でもなく、たまたま異なっているにすぎない。この原子のような「点」を印刷の「点」にシフトし、自ら撮影した写真を素材に製版カメラで点集積の密度を変化させた時に、物が空間のなかで消失あるいは転移のドラマを演ずる遠藤の版画世界が成立したのである。この作品の実物も近づいて見ていただければ、図版と同じく点からなっていることに気付いてもらえるだろう。

このように発想と手法との間の筋道が見通しよい彼の表現世界は、明快で確信に満ちている。だがそれ以上に見る者を魅了するのは、びん・卵・コップなどのモティーフがもつ整理された形・淡く繊細な色調・構成上のバランスが生む静けさと詩情であろう。国内・海外の版画展でも彼の評価は高く、ここにあげた作品も'80サンシャイン版画グランプリ展石版画部門で対象を、また第３回ワールド・プリント・コンペティション（サンフランシスコ近代美術館）で特別賞上賞を受賞している。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より